右の通賴朝御諱の上の字を被下置候。御朱印を今度取出し申に付、舊例右の通被相定者也。

青屋𥨊立と申は形も付不申候。惣て藍染仕ものゝ由。且又關守とは本關守奉行などまでにては無之、當世も所々有之道留の儀にて候。

愚曰。右二十八品を數へ見るに、二十七品ならでなし。青屋𥨊立と云もの、恐くは二品なるべし。青屋はこゝにいへる藍染のものならん。𥨊立は外のものならん。然れば二十八品の員みちぬ。且又本書に辻其目とあるは、辻盲なるべし。弓鍼師はよめがたし。盜賊・馬類の二つも難解。馬類は馬形か。かならずしも相究て益なき事也。

一、田中玄通茶入の目利

柳原式部大輔殿に醫師あり。名ケンシュン氏不知。田中玄通心安く候に付、式部殿、玄通目利の事を聞き、在所より茶入を三つ取寄見せられし。殊の外宜物と家傳也。二つは仰り、一つは近く求被申候。玄通見申、三つとも何の用にも立不申物なるに付、一つはぬり物。ぬりものとは、宜燒しほの土にて釜申候由。有樣に申遣し候へば、其後式部殿より彼醫師を以、此度茶入爲見候處不宜由、惡敷物を宜と存じ、人へおくり候ては無本意事、又自分に貯置候ても無益なりしに、有樣に申聞滿足せり。數寄のよし承及とて、茶に羽織を添て送られしと也。式部大輔殿被申越樣、常人の難及事玄通は喜多見右衛門殿茶道にて、其後道具屋を仕り、今は目利にて世を渡たるとぞ。實に享保三年の比也。

一、賴朝・範賴・義經・梶原四人の心の畫

賴朝・範賴・義經・梶原四人の心を畫に畫て上よとあり。大眼公、探題に被仰付候と云へども、其時書上しは賴朝と梶原碁をうち給ふ、公及探題の個は不被仰候。外二人は見物也。其所へ雷の落たるを畫候。其時義經は刀の柄に手をかけ給ふ。蒲生殿は兩耳に手をあて給ふ。賴朝は碁石を手の指に挾みて、雷を侵に見給ふ。其騷敷內に梶原は、はまを盜む躰を畫たりしとぞ。誠に人々の生質さもあらんかし。

一、近衛應山公、冠を脫がせらるゝ事

近衛關白後稱應山御茶まゐるべしとて、千宗旦方へ御成ありし時、國へ御入候へば床に利休が文をかけたり。床の角には冠棚を儀置候。關白仰らるゝは、此かけ物をかくる事、我等など招候にはいかゞと思ふ事也と被仰。宗旦申上候は、是は私ども先祖にて、茶方の儀に候へば利休を以て宗と仕候。たとへ天子とても、かこひへいらせられ候ては、利休が文を賞翫と仕候に付、かけ申旨申上候へば、そこにて尤なりと被仰、御冠を御ぬぎ被成候へば、そのまゝ右の冠棚へ上げしとぞ。脇田夕庵話

愚曰。此事に似寄たる事あり。一條兼良は、其時節博識の名ある人也。二人招請して、床に菅家の像をかけたり。禪閤大きに機嫌を損じ、我等を招て菅家の像をかくる事不相應也。儒學の名ありといへども、菅家は唐の中世に當りたる人にて、其識る所幾もなし。我は唐・宋・元・明を經て其知所甚多し。本朝の事も亦然り。官職を以ていへば、某既に人臣の位を極たり、何ぞ我等が前にかけ置べしやと被申候へば、亭主おそれて取かへしと云事あり。禪閤の用心、扨々片腹いたき事ならず哉。古人を崇敬するは、第一德義を慕て不及までも、其人の德義を學べきが爲也。たとひ當世の人にても、其年德を以て尊崇する事、古今の通義ならずや。博識多材、古今を一貫すとも何の可貴ことならんや、文藝の一事にて顧問の用を可勤迄也。是さへ陋むべき事なるに、況や其身の官職の高きをや。趙孟が貴する者は、趙孟又賤しんずる事は知給はずや。且古今世道の變及故事來歷の跡を覺えて、是を以て貴き事とするならば、古への聖人賢者は、一事も識給ふまじ。何を貴ぶべしや。今以て堂上の學風、猶此餘弊ありて少しく才學あれば、己れにほこり、人を慢るの媒とす。可悲哉。唐土にてもか樣の輩あるが故にや、劉知幾と云人、學者を戒めて曰。士たる者は文藝を後にして、器識を先にせよと被申候。況や聖人の學は器識のみに不止をや。禪閤位官におごり給ふ事、猶更器小しと可申候。菅家は讃岐守となりて、政敎いちじるきに依て、宇多帝、五位より登庸なされ、間もなく大臣に遷て、國家の政柄を取給ふ。不幸にして讒邪の臣に逐はれ給うて、其事業後世に不傳。禪閤の時代は王家衰微し、位人臣を極むといへども、空位空官にして一事も民に及ぶの功なし。か樣の儀にも不心附、不遜の言を出し給ふ、可謂不自知者也。

一、酒井雅樂頭が式𥨊長刀の由來

享保三年閏十月十五日酒井雅樂頭殿南鄕由殿は巡尉にて巡尉の邸に御住居。へ御使相